

# 最も強かった戦国大名は？

中3-B-20 寺井 祐稀

## 目次

はじめに

第1章 各地の戦国大名について

第1節 戦国大名とは

第2節 各地方の戦国大名について

第2章 最も強かった戦国大名は誰か？

第1節 最も強かった戦国大名を決めるにあたって

第2節 最も強かった戦国大名についての考察

おわりに

参考文献

## はじめに

皆さんは戦国大名についてどれほどご存知だろうか。僕は偶然手に取った織田信長についての本をきっかけに小学生の頃から戦国武将が好きになり、各地方の主な戦国大名についてはほとんど知っている。戦国大名は守護大名から成長したものや、守護大名が京都で室町幕府の政治に参加したために、領地の管理を任せていた守護代が戦国大名になる場合、そして、守護大名の家臣から、戦国大名に成り上がった例を含めるとおよそ 150~300 ほどいたと言われている。もちろんそんな戦国時代では実力がなければ生き残っていくことは容易ではない。ではその中で最も強かった戦国大名は誰だろうか。

残虐ながらもカリスマ性をもち戦国の世を駆け抜けた織田信長か、甲斐の虎と呼ばれ風林火山の軍旗で有名な武田信玄か、越後の龍と呼ばれ武田信玄のライバルである上杉謙信か、色々な意見があるが、はたして誰が最も強かったのか。

僕自身も前々からとても強い戦国大名が沢山いたことは知っていたが最終的に誰が最も強かったかはわからない。本論文ではその最も強かった戦国大名について推察したい。

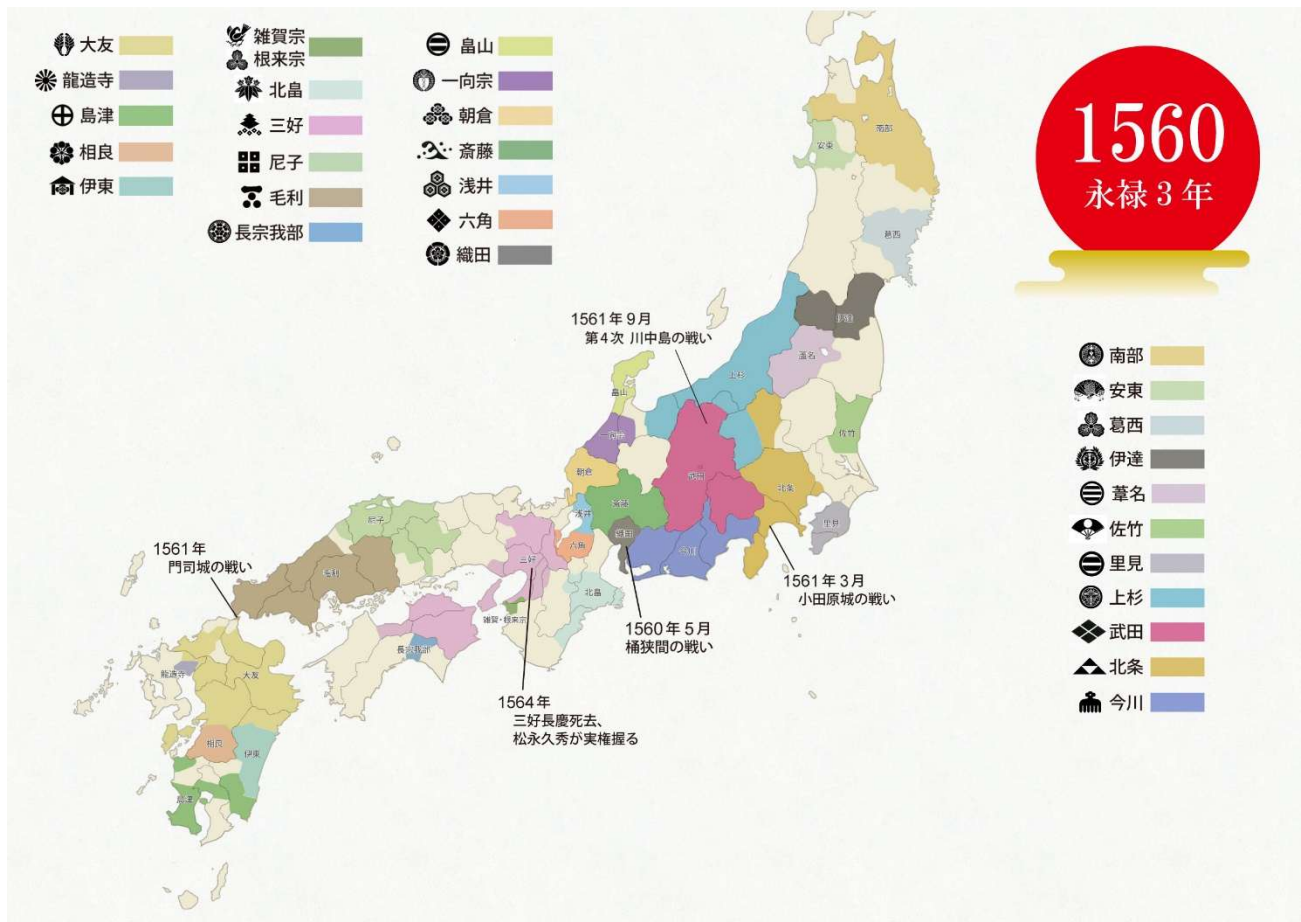
# 第1章 各地の戦国大名について

## 第1節 戦国大名とは

まず、戦国時代とは応仁の乱（1467年）が始まってから大坂夏の陣（1615年）が終わるまでの約150年間のことである。「応仁の乱」とは、応仁元年（1467年）から文明9年（1477年）まで続いた京都を中心とする内乱のことである。それまでの京都は足利将軍が統治する室町時代が続いていたが、やがて将軍の弟と息子で後継争いが始まる。これが「応仁の乱」で、以後幕府の権力は失われるのである。そんな中、各地に生まれ、自分の実力によって領国を支配したのが戦国大名である。

そして、戦国大名には主に3種類がある。1つ目は守護大名から成長したもので、甲斐の武田氏や駿河の今川氏などである。そして、2つ目は有力な守護大名が、京都で室町幕府の政治に参加する間に、領地の管理を任せる「守護代」が、下剋上によって領地を奪い、戦国大名になる場合だ。越前の朝倉氏、越後の上杉氏などは、このケースである。最後に、3つ目は守護大名の家臣から、戦国大名に成り上がった例だ。中国地方最大の戦国大名に成長した毛利氏が、代表的な例である。

そして、次の図は永禄3年の勢力図である。



## 第2節 各地方の戦国大名について

### ①東北の戦国大名

東北地方は、陸奥国と出羽国の2か国に分けられ、両国をまとめて「奥羽」と呼んだ。そして、その奥羽は幕府の支配力が及びづらく、葛西・南部・白川・蘆名・伊達などの国人領主が力をつけ大名となった。

その中でも、最上義光は領内改革と領土拡大に取り組み、天童家や寒河江家といった名族を屈服させ、1584年（天正12）までに出羽半国を統一する。

そして、同年に伊達輝宗が長男・政宗に家督を譲る。しかし、その翌年に輝宗が二本松城主・畠山義継に拉致されてしまう。駆けつけた政宗は父もろとも義継を銃撃し、始末をつけた。その後、政宗は父の弔い合戦として、二本松城を包囲する。すると、二本松救援の名目で反伊達派の佐竹義重をはじめ、蘆名家ら南奥州諸大名の連合軍が到来し、政宗の軍勢と激突した（人取橋の戦い）。苦戦に陥った伊達軍だが、連合軍も北条家や里見家に背後を取られる恐れから撤退し、1日で終結。その後も諸勢力との戦いは苦境の連続だった。しかし、1589年（天正17）の摺上原の戦いで会津地方の名門・蘆名家を破り、滅亡に追い込む。この勝利で政宗は南奥州の覇者の名にふさわしい勢力を持つようになる。



伊達政宗

主な家臣：伊達成実、片倉景綱、支倉常長  
武の伊達成実・智の片倉景綱を率い、騎馬鉄砲隊という奇想天外かつ強い部隊を作った政宗はとても強かったと言える。

（京都府：東福寺霊源院所蔵）

## ②関東の戦国大名

関東は戦乱が収まらず、混乱の中にあった。そんな中、幕府に仕える名門・伊勢家出身の伊勢宗瑞（北条早雲）が現れる。早雲は1476年（文明8）頃、義兄・今川義忠の戦死による家督争いを収めるために駿河へ下った。義忠の従兄弟・小鹿範満を倒し、甥の龍王丸（今川氏親）を今川家当主に据えることに成功した早雲は、その功で駿河興国寺城（静岡県沼津市）の城主に躍り出る。次いで1493年（明応2）に堀越御所を落とした早雲は、足利茶々丸を伊豆から追放。伊豆1国を手中に収める。そして、戦国大名・北条家が誕生する。その後、伊豆の韮山を拠点とし、関東へ侵攻。旧勢力同士の抗争で混乱が続いていた中、その隙に乗じて、小田原城を奪取。さらに、1516年（永正13）には三浦半島の三浦家を滅ぼす。こうして早雲は伊豆・相模を平定、関東北条家の基礎を築き上げた。

そして、2代目の北条氏綱は小田原城を新たな拠点とし、武蔵や下総に領土を拡大した。しかし、1541年に氏綱は病没し、子の氏康が家督を継ぐ。大物の氏綱が没した隙に乗じ駿河の今川義元が関東管領の山内上杉家や扇谷上杉家と手を組み、さらに武田信玄の加勢を得て東進を始める（第2次河東の乱）。氏康は駿河へ出陣するも戦況は不利だった。さらに、義弟・北条綱成が守る河越城が、関東の諸大名と国人衆を率いた山内・扇谷両上杉家の大軍に包囲される。絶体絶命の中、氏康は今川・武田と和睦をする。西の脅威を除いた氏康は河越城の救援に向かう。3000人程度の城兵しかいない河越城を関東の連合軍8万が包囲する絶望的な状況だったが、氏康はこの戦いに勝利。関東における北条家の地位を不動のものとした。



北条氏康

主な家臣：北条氏照、北条氏邦、大道寺政繁

板部岡江雪斎

相模の獅子と呼ばれ、甲斐の虎・武田信玄や越後の龍・上杉謙信とも肩を並べ、戦った氏康はかなり強かったと言える。

(神奈川県：早雲寺所蔵)

### ③甲信越の戦国大名

越後では守護の上杉家が守護権力を強化したことから、守護代の長尾家との関係が険悪になる。このため守護代の長尾為景は、守護を幽閉して越後を支配下に置いた。この下剋上後も為景は幕府とのつながりを強めて長尾家の地位向上をはかり、さらに関東への介入も中断して国内の統治を優先。また、国人勢力の平定に専念した。そして、為景の末子の景虎（上杉謙信）が平定を果たす。

甲斐では小山田家ら国人勢力が強く、守護の武田家の支配体制は盤石ではなかった。しかし、これらを平定したのが武田信虎である。信虎は合戦や和睦などの手段で国人領主を取り込んだ。そして、信達と交戦中に、居館の躑躅ヶ崎館と詰城の要害山城を築く。この城下町が甲府である。東西の出入り口には市場が置かれ、経済を潤した。しかし、信虎が合戦を続けることで、国人領主の負担が増えたため、反乱の勃発を危惧した嫡男・晴信（信玄）は信虎を駿河に追放した。

信濃では小笠原家が守護となっていたが、村上家・諏方家・木曾家ら国人領主勢力が力を持っていた。やがて、この信濃に甲斐の武田信玄が進出し、信濃を追われた小笠原長時・村上義清が越後の上杉謙信に助けを求め、甲斐の虎と越後の龍がぶつかることとなる。



上杉謙信

主な家臣：直江景綱、長尾政景、本庄繁長、北条高広  
越後の龍や軍神とも呼ばれ、甲斐の虎・武田信玄とも肩を並べた謙信はかなり強かったと言える。

(山形県：米沢市上杉博物館所蔵)



武田信玄

主な家臣：板垣信方、武田信繁、山本勘助、真田幸綱、  
馬場信房、内藤昌豊、山県昌景、高坂昌信  
甲斐の虎と呼ばれ、山本勘助や山県昌景などの武田二十四将と呼ばれる家臣もおり、当時最強と言われた武田軍を率いた信玄はかなり強かったと言える。

(和歌山県：高野山成慶院所蔵)

#### ④東海の戦国大名

駿河では今川範国以来、守護職は今川家が独占した。そして、範国の子義忠の死後、子の氏親が叔父北条早雲（伊勢宗瑞）の支援で家督を継ぐ。氏親は、遠江に侵攻し、実力で支配下においた。そして検地を行い、分国法の「仮名目録」を制定。こうした施策により、今川家は戦国大名に発展した。また、氏親の子義元も、「仮名目録」を補訂する形で「仮名目録追加」を制定し、領国の安定化に務めた。

駿河を今川氏親が統治していた頃、美濃では、守護の土岐家で家督争いがおこっていた。原因は、土岐政房が嫡男頼武を差し置いて次男頼芸を跡継ぎに指名したことにある。このため、頼武と頼芸が兄弟で家督を争うことになった。そうした中、頼芸を支援することで実力者となったのが、守護代斎藤家の名跡を継いだ斎藤道三である。道三は頼武のみでなく主君であった頼芸をも追放し、名実ともに美濃1国の太守となった。

尾張では、岩倉城を本拠に上4郡を支配する岩倉織田家と、清須城を本拠に下4郡を支配する清須織田家が勢力を二分していた。織田信長の父信秀は、清須織田家の家臣にすぎなかったが、徐々に勢力を拡大。駿河の今川義元に対抗するため、美濃の斎藤道三と手を結び、信長の正室に道三の娘を迎えた。

三河では、岡崎城の松平清康が一国を支配するほどの勢いがあつた。しかし、織田信秀と対立した清康が、自ら尾張へと侵攻したところ、その陣中で暗殺されてしまう。これにより松平家が急速に弱体化し、それまで清康に攻め込まれ続けていた信秀が西三河に進出した。清康の跡を継いでいた子の広忠は、駿河の今川義元に支援を要請する。ところが、広忠が人質として義元のもとに送った子の竹千代（のちの徳川家康）は、信秀に奪われてしまった。そして、1548年（天文17）に、今川義元は、西三河から織田信秀の勢力を一掃するため、出陣する。翌年に、松平家を従えた義元が三河を制圧する。

織田信秀が病没した後、嫡男の信長が家督を継ぐ。信長は、岳父斎藤道三の支援を受けながら尾張平定へ乗り出していく。しかし、信長の理解者であった道三は長良川の戦いで子の義龍に敗れ、討死してしまう。こうした中で、信長は弟信勝との家督争いを制しながら、ついに岩倉城の織田信賢を追放し、尾張をほぼ統一する。勢力を拡大させていく信長に義元は危機感を抱く。義元が尾張への出兵を図ったことで、桶狭間の戦いに発展する。そして、その桶狭間の戦いに勝利した信長は、今川家からの自立を図った三河の松平元康（徳川家康）と同盟を結び、義龍の跡を継いだ龍興のいる美濃へと侵攻する。この頃から信長のもとで、木下藤吉郎（のちの羽柴秀吉）が頭角を現す。そして、信長は天下統一への道のりを歩んでいく。

桶狭間の戦いで今川義元が敗死した後も、子の氏真は健在であった。妻子を人質として取られていた元康は、今川家に従属する姿勢を見せながら、信長と同盟を結び、勢力の拡大を始める。そして三河一向一揆を平定した元康は徳川家康に改名し、戦国の世をかけていく。



### 織田信長

主な家臣：柴田勝家、丹羽長秀、明智光秀、  
滝川一益、池田恒興、前田利家、  
佐々成政

家臣が非常にそろっており、経済力も駆使しながら、  
数々の敵を圧倒的な力でねじ伏せた信長は戦国大名  
の中でもかなり強かったと言える。

(愛知県：長興寺所蔵)



### 羽柴秀吉

主な家臣：豊臣秀長、加藤清正、福島正則、  
石田三成、黒田官兵衛、大谷吉継、  
竹中半兵衛

「戦わずして勝つ」を基本とし、百姓の出から天下  
統一を成し遂げた秀吉は総合的な面でかなり強かつ  
たと言える。

(京都府：光福寺所蔵)



### 徳川家康

主な家臣：酒井忠次、本多忠勝、榊原康政、  
井伊直政、服部正成

忠誠心の強い三河武士を率い、徳川四天王とも呼ば  
れる知力・武力ともに優れた家臣を束ね、羽柴秀吉  
とも肩を並べ、天下を取り、幕府を開いた家康はと  
ても強かったと言える。

(大阪府：大阪城天守閣所蔵)

## ⑤北陸の戦国大名

5つの国が位置した北陸では、越中と能登の守護を務めた室町幕府三管領家の名門・畠山家が強い勢力を持っていた。

越中の守護代は畠山家譜代家臣の神保家・遊佐家と国人の椎名家が土地を分割して務めた。一方の能登は守護を畠山家分家筋の能登畠山家、守護代を遊佐家が務め、越中と強いつながりがあった。

越前では守護の斯波家を守護代の朝倉家が下剋上で倒して戦国大名化した。若狭は守護・若狭武田家が家臣や国人領主の反乱で弱体化し、朝倉家の領地に実質上合併された。

加賀は、北陸でも特殊な存在だった。守護を務めた国人の富樫家が一向一揆に敗れたのち、一揆による支配が約1世紀続いた。加賀一向一揆は、京都本願寺の浄土真宗（一向宗）の僧・蓮如が加賀で布教したことに始まる。しかし、後ろ盾の大坂本願寺が織田信長と講和すると一向一揆は勢いを失い、信長に攻められ解体した。

越前を戦国大名として5代約1世紀にわたり支配した朝倉家。7代・孝景の時に応仁・文明の乱と絡む斯波家の内紛が勃発。孝景と8代・氏景がそれに乗じて斯波家を破り、実権を握った。そして、10代・孝景の時に最盛期を迎えた朝倉家だが、11代・義景は領土拡大を積極的に行わず文化活動を重視した。

## ⑥京・近畿の戦国大名

応仁・文明の乱の後、細川京兆家が実権を握り、京兆家内部の権力争いが、将軍の交替に影響を与えていた。そんな中、三好長慶が実権を掌握していた細川晴元を撃破して京を制圧。さらに、将軍足利義輝も破り実権を握る。そして、拠点を移しながら勢力を拡大し、最盛期には、阿波・讃岐・淡路・摂津・山城・河内・和泉・大和・丹波、及び伊予東部・播磨東部に及んだ。当時、天下は近畿周辺を指す言葉で、長慶は事実上の天下人と認識されていた。しかし、その天下も長くは続かず、攻勢をかけてきた将軍義輝を京に迎え、自身は管領に次ぐ相伴衆となり政権は瓦解。一方の義輝も、三好家の重臣として台頭した松永久秀の子久通らに暗殺されてしまう。また、一条院門跡の弟義昭も松永久秀に幽閉される。その後、幕臣細川藤孝に救出された義昭は、近江や越前など各地を転々とするが、最終的には織田信長の岐阜へ向かう。義昭を迎えた織田信長は、幕府再興を名目として上洛を開始した。

近江では、もともと北近江守護京極家の家臣として並び立つ十数の国人の一つにすぎなかった浅井家が当主亮政の時、京極高澄を追い国人連合の盟主的存在となり、小谷城を築いて北近江3郡に地歩を固める。南近江守護六角家とも抗争を繰り広げ、越前朝倉家の援助を受けながら江北の支配を保った。しかし、子の久政が六角義賢に破れて臣従を余儀なくされた。これに久政の嫡子長政が反発する。臣従路線をとる久政を隠居させ、六角家重臣の娘である妻を離縁。敵対姿勢を明らかにし、初陣の野良田の戦いで六角軍を撃破し、戦国大名として自立を果たした。その後、六角家では内紛が勃発、重臣の離反が相次ぎ、間もなく上洛を目指す信長に破れて没落する。

この他にも、伊勢の北畠氏、丹波の波多野氏、播磨の別所氏、大和の筒井氏などがいた。

## ⑦中国の戦国大名

周防を治めていた大内義興は 1508 年（永正 5）、将軍の座を追われていた足利義植とともに上洛。義植を再び将軍職に復帰させることに成功する。その後も 10 年にわたって京に留まった。だが領国を不在にしている間に、中国地方では尼子経久が勢力を拡大しつつあった。義興は領国の基盤を固めるために、帰国せざるを得なくなった。大内家と尼子家の対立は、大内義隆、尼子晴久の代になってから、より激化した。1540 年（天文 9）、尼子軍は大内方に属していた毛利元就の城を攻めたが、大内軍はこれを撃退（吉田郡山城の戦い）。すると今度は大内軍が出雲に遠征するが、手痛い敗北を喫した。以後、大内家の勢いは失速する。

毛利元就は、安芸国吉田荘の国人・毛利弘元の次男として生まれ、27 歳の時に当主となる。安芸は大内勢と尼子勢が拮抗する場所に位置しており、当時毛利家は尼子方だったが、元就は大内方への鞍替えを決断し、尼子方の高橋家や武田家を倒し、所領の拡大に成功した。吉田郡山城の戦いでは、尼子勢の大軍に居城を攻められるが、少数の手勢で守り抜き名を高めた。また、元就は、安芸の有力国人の小早川家に三男の隆景、吉川家に次男の元春を養子に送り込み、実質的に両家を乗っ取った。その上で元就は家臣に対して毛利家に従うことを誓った起請文を提出させた。これにより毛利家と他の国人は、対等な国人同盟から臣従の関係へと変化した。

尼子勢との戦いに敗北した大内義隆は、やがて政治への関心をなくして文芸にのめり込んでいく。これに危機感を抱いた重臣・陶隆房は、1571 年（天文 20）に反乱軍を率いて義隆を自刃に追い込んだ。そして大友家から大友義鎮（宗麟）の弟・晴賢を迎え入れ、大内義長として大内家の当主に据え、隆房も晴賢に名を改めた。義長は当主とはいえども、実質は晴賢の傀儡だった。一方毛利元就は、晴賢に従う姿勢を見せつつ、勢力をさらに拡大させた。こうして安芸や備後の地場を固めた上で、元就は当初の姿勢を翻して晴賢に断交を宣言。両者は厳島の戦いにおいて激突する。結果は毛利勢の勝利に終わり、晴賢は自害。さらに義長も追討され、大内家も滅亡した。次いで元就は、尼子家の居城・月山富田城を包囲してこれを追い込み、名実ともに中国地方の覇者となった。



毛利元就

主な家臣：吉川元春、小早川隆景、穂井田元清、  
宍戸隆家

権謀術に長け、稀代の策略家としても有名であり、一代で中国地方統一を成し遂げたことから非常に強かったと言える。

（山口県：毛利博物館所蔵）

## ⑧四国の戦国大名

四国では、室町時代から讃岐と土佐を細川京兆家が、阿波を細川一門の阿波細川家が守護職を世襲してきた。唯一伊予だけは、地元の有力豪族であった河野家が守護職の座にあった。しかし、応仁・文明の乱後、一時は室町幕府の権力を恣にしていた細川京兆家に内紛が続き、領国に対する支配力も減じていき、四国は戦乱期に入った。

畿内で細川晴元との争いに敗れた三好元長の子・長慶は、1548年（天文17）に江口の戦いで晴元に勝利。以後、実質的な権力は、細川家から三好家へと移った。しかし、長慶を支えていた優秀な三人の弟たちの二人が間もなく亡くなってしまう。三好家による支配は長続きしなかった。

室町時代、伊予では一時的な中断を除いて河野家が守護を務めてきた。しかし16世紀半ばに、通直（弾正少弼）・晴通父子の対立が激化。家臣団を二分する争いが繰り広げられた。結局河野家は、戦国大名として勢力を拡大できず、衰退していくことになる。

土佐では、西部については一条家が基盤を固めて支配を確かなものにしていて、それ以外の地域では「土佐七雄」と呼ばれる各地の国人たちが勢力争いを繰り広げていた。その一つだった長宗我部家は、国親の代に土佐中央部において躍進した。1547年（天文16）には天竺家、翌々年には山田家を打倒。国親は宿敵本山家との争いのさなかに急死するが、後を継いだ元親は、本山家を倒して中央部を手中に収め、さらには安芸家も滅亡に追い込んで東部も支配下に入れた。そして西部の一条家との戦いに勝利して、土佐統一を成し遂げたのである。



長宗我部元親

主な家臣：長宗我部信親、吉田孝頼、谷忠澄

土佐国の豪族だった長宗我部氏を戦国大名にまで成長させ、四国を制覇したことから「土佐の出来人」と呼ばれた元親はかなり強かったと言える。

（高知県：秦神社所蔵）

### ⑨九州の戦国大名

豊後守護大友家は相模国大友荘の地を名字とする名族である。15世紀初頭、親治・義長父子の時、内紛を収めて戦国大名になる。次の義鑑は大内義隆に対抗しつつ、幕府と結んで豊後・筑後・肥後の守護となり大友家の基盤を強化したが、嫡子義鎮（宗麟）の廢嫡を謀り家臣に暗殺された（二階崩れの変）。宗麟は菊池義武を滅ぼして肥後に勢力を伸ばし、中国地方にも影響力を及ぼしていった。そして、宗麟は幕府に買官運動を行い、肥前・豊前・筑前の守護職を加えて6カ国の太守となり、九州探題職も得て九州最大の戦国大名にのし上がった。しかし、肥前で国人出身の龍造寺隆信が主家である少弐家を滅ぼし、毛利と結んで宗麟に対抗。宗麟は重臣立花道雪らの活躍で反乱を鎮圧。毛利軍も北九州から撤退させた。

島津家は鎌倉時代初頭、初代忠久が薩摩・大隅・日向の守護職に任じられて以来、南九州を拠点としてきた名門である。15世紀末、貴久が同族間の争いを制して薩摩・大隅・日向の守護となり、1550年（天文19）に鹿児島に内城を築いて拠点とした。しかし当時、島津家が直接支配できたのは、薩摩だけであった。以後20年、島津家は貴久、子の義久・義弘の2代にわたり大隅・日向の経略を進める。義久は薩摩の入来院・祁答院、大隅の蒲生・肝付を次々と撃破。1577年（天正5）、伊東義祐を追って日向を平定し「三州統一」を果たす。この間、肥前では龍造寺隆信が今山の戦いで大友軍を撃退した後、大村純忠や有馬晴信らを破り肥前を統一。大友宗麟は伊東義祐を保護して日向への進出を狙い、ここに大友、島津、龍造寺が九州を3分する「九州三国志」と呼ばれる状況がうまれた。



島津義久

主な家臣：島津義弘、島津歳久、島津家久、  
新納忠元

最強との呼び声も高い義久・義弘・歳久・家久の島津四兄弟を筆頭に九州を平定し、鬼島津とも呼ばれた島津軍はまさに最強であったと言える。

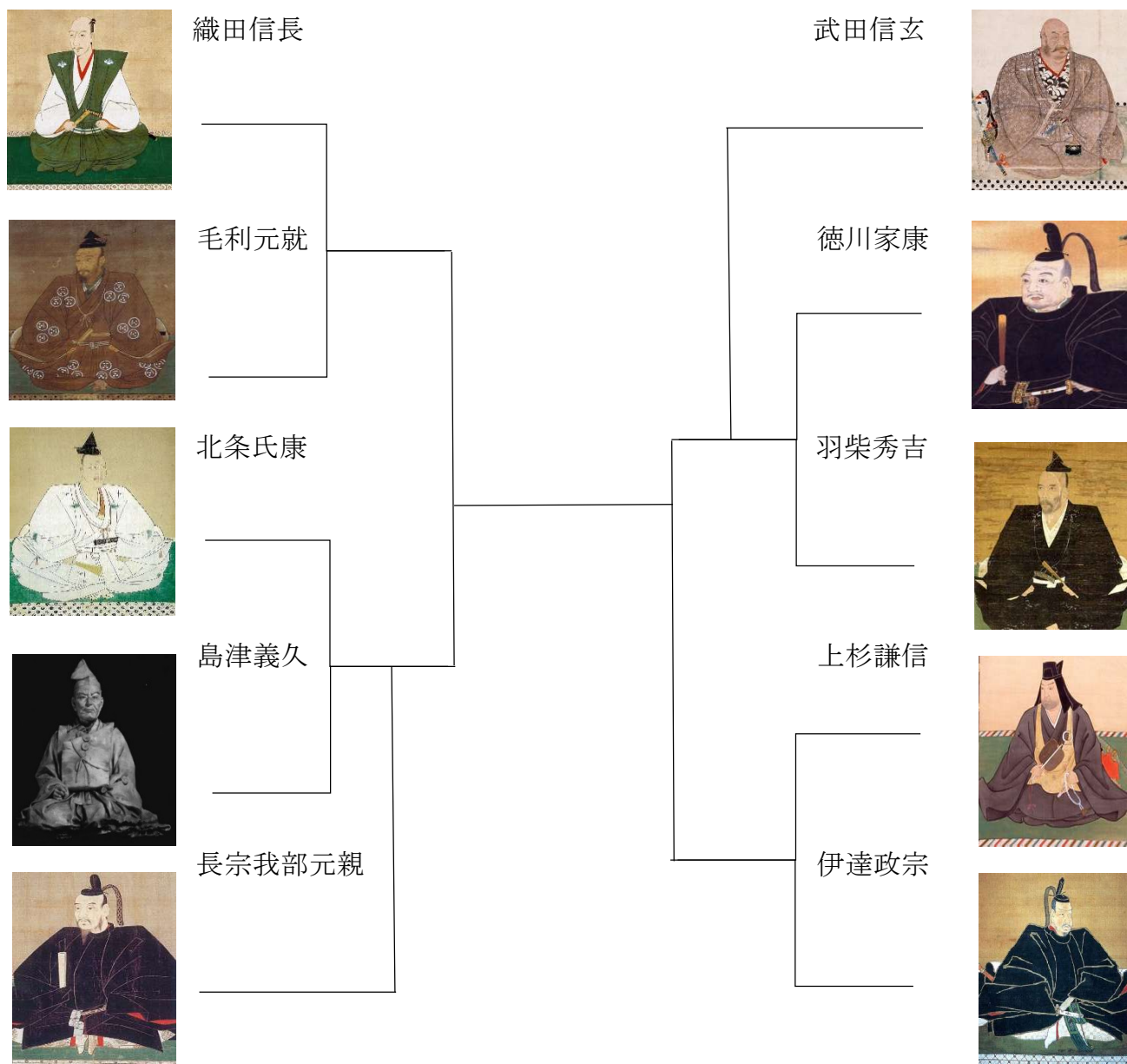
（東京都：東京藝術大学大学美術館所蔵）

## 第2章 最も強かった戦国大名は誰か？

### 第1節 最も強かった戦国大名を決めるにあたって

まず、最も強かった戦国大名を決めるにあたって今回は国を治める能力ではなく、戦う能力だけに注目して結論を出そうと思う。よって、それぞれの戦国大名の家臣、鉄砲数や、どのくらいの兵士がいたかなどの軍事力、そして戦い方や戦術といった3つの点で比較をする。そして、その3つにおいて勝っているものが多い方を勝者とする。

次に、戦国大名には3つの種類があり、合わせて150から300ほどいたといわれているが、その中には戦いが苦手な戦国大名もいたので、戦国大名の中でも特に強かったと言われている（1章第2節において肖像付きで紹介した）10人の中から最も強かった戦国大名を決めようと思う。そして、今回は1番を決めるだけであるので、下のようなトーナメント表を使って戦国大名どうしを比較する。そして、このトーナメントで1番になった人を最も強かった戦国大名とする。



## 第2節 最も強かった戦国大名についての考察

### ①織田信長 対 毛利元就

まずはそれぞれの家臣を比較していこうと思う。織田信長の家臣は下のように戦国大名の中でも屈指の家臣団を誇っており非常に強い。それに対して、毛利元就には勇猛な吉川元春・知将の小早川隆景といった優秀な家臣がいた。しかし、圧倒的な信長の勢力拡大を支えた織田家臣団の方が強かったと言える。

次にそれぞれの軍事力を比較していこうと思う。織田信長の最大動員兵数はおよそ175000人、毛利元就の最大動員兵数はおよそ32500人とされており、数では信長が勝っている。また、織田軍は3000挺もの鉄砲を保持しており、陸上面ではやはり織田軍の方が強い。そして海上面では元就が瀬戸内海の村上水軍を味方につけていたのに対し、織田軍には九鬼水軍がいた。実際にこれらは第二次木津川口の戦いでぶつかっており、九鬼水軍の鉄甲船が村上水軍を圧倒した。よって海上面においても織田軍が勝っている。よって総合的に織田軍の方が強かったと言える。

最後にそれぞれの戦術を比較していこうと思う。織田信長は桶狭間の戦いを除いて、通常は敵よりも多くの兵力を用意して戦う戦術を採っていた。それに対し、毛利元就は少数の兵ながらも色々な戦術を駆使し大軍を倒すのが得意であった。よって戦術においては毛利元就が勝っていたと言える。

よって、2対1で織田信長の勝利とする。



織田信長

主な家臣：柴田勝家、丹羽長秀、明智光秀、  
滝川一益、池田恒興、前田利家、  
佐々成政

最大動員兵数：175000人



毛利元就

主な家臣：吉川元春、小早川隆景、  
穂井田元清、宍戸隆家

最大動員兵数：32500人

## ②北条氏康 対 島津義久

まずはそれぞれの家臣を比較していこうと思う。北条氏康には、政治・軍事的能力に長けた氏照、文武に達した板部岡江雪斎などがいた。それに対し、島津義久には自身も含め、知力・武力がともに秀でた戦国最強とも呼ばれた島津四兄弟がいた。よって、島津義久の家臣の方が強かったと言える。

次にそれぞれの軍事力を比較していこうと思う。まず、それぞれの最大動員兵数について考えていこうと思う。北条氏康はおよそ 37500 人、島津義久もおよそ 37500 人とされており、数の上では互角である。しかし、島津氏は火縄銃が伝来したと伝わる種子島氏の国主であるため、伝来して間もなく種子島時堯によって火縄銃と火薬の製造方法が献上されており、火縄銃の威力については早くから知っていたので、鉄砲戦術に優れていた。九州を平定できたのはこの火縄銃の存在が大きかったと言われている。また、関ヶ原の戦いにおいて死を覚悟した島津軍は恐ろしく、猛将の福島正則ですら退却する島津軍を追撃するのをやめたほどであった。よって軍事力においては島津軍の方が強かったと言える。

最後にそれぞれの戦術を比較していこうと思う。北条氏康は籠城戦を得意とし、上杉謙信や武田信玄に小田原城を攻囲されたが、上手く守り通した。そして、信玄が退却した際には、凄まじい追撃を行った。それに対し、島津義久は伏兵を忍ばせておいて、先攻部隊（囷）が敵陣に突入してわざと退却、敵を伏兵が隠れているエリアまで誘導、機を見た伏兵が敵を側面から不意打ちするという「釣り野伏せ」という戦術を何度も使用し幾多の勝利をあげてきた。よって北条軍が誘い込まれて、義久の罠にはまる可能性が高い。したがって、島津義久が勝っていたと言える。

よって 3 対 0 で島津義久の勝利とする。



北条氏康

主な家臣：北条氏照、北条氏邦、  
大道寺政繁、板部岡江雪斎  
最大動員兵数：37500 人



島津義久

主な家臣：島津義弘、島津歳久、  
島津家久、新納忠元  
最大動員兵数：37500 人

### ③徳川家康 対 羽柴秀吉

まずはそれぞれの家臣を比較していこうと思う。まず徳川家康の家臣は、酒井忠次・本多忠勝・榊原康政・井伊直政の徳川四天王を中心に、家康に対する忠誠心が高く、団結力が強かった。対して、豊臣秀吉の家臣は竹中半兵衛・黒田官兵衛の両兵衛を軍師に、猛将の加藤清正・福島正則もあり、知勇バランスのとれた家臣団であった。どちらも戦国時代最強格の家臣団であり、主君を天下統一に導いたので、家臣においてはどちらが勝っていたとは言えない。

次にそれぞれの軍事力を比較していこうと思う。まず、それぞれの最大動員兵数について考えていこうと思う。徳川家康の最大動員兵数はおよそ 100000 人とされており、羽柴秀吉の最大動員兵数もおよそ 100000 人とされている。次に、それぞれの兵質について考えていこうと思う。家康が率いる三河武士は主に対して利害よりも情義を重んじ、非常に忠実であった。そして、三河武士の強さを表した「三河衆一人に尾張衆三人」という言葉がある。三河衆とは徳川軍のことであり尾張衆とは織田軍のことである。それに対し、秀吉はもともと織田信長の家臣であったため秀吉は織田軍と同じ尾張衆を率いていたことが分かる。よって最大動員兵数とあわせて考えると、軍としては徳川軍が勝っていたと言える。

最後にそれぞれの戦術を比較していこうと思う。この二人は実際に小牧・長久手の戦いにおいてぶつかった。羽柴秀吉は犬山に、徳川家康は小牧山にて対峙し、双方打つ手もなく、睨み合っていた。これは五分五分の睨み合いであり、この場合、先に動いた方に虚が生じる。戦況は長期戦の様相を呈しはじめた。それでも、忍耐に慣れた家康に迷いはなく、家康のこの不気味な沈黙が、秀吉に迷いを生じさせ、ついには秀吉の状況判断を誤らせることになる。秀吉が最初は逡巡していた別働隊を使って家康をおびき出すという策を実行してしまう。その知らせを聞いた家康はすぐさま羽柴軍の別働隊を襲撃し、壊滅した。よって戦術面においては徳川家康の方が優れていたと言える。

よって2対0で徳川家康の勝利とする。



徳川家康

主な家臣：酒井忠次、本多忠勝、  
榊原康、井伊直政、服部正成

最大動員兵数：100000 人



羽柴秀吉

主な家臣：豊臣秀長、加藤清正、福島正則、  
石田三成、黒田官兵衛、  
大谷吉継、竹中半兵衛

最大動員兵数：175000 人

#### ④上杉謙信 対 伊達政宗

まずはそれぞれの家臣を比較していこうと思う。まず上杉謙信には「上杉二十五将」と呼ばれる家臣がいたが、謀反が多く、まとまりがなかった。それに対し、伊達政宗には非常に優秀な武の伊達成実、知の片倉景綱がおり、どちらも政宗に信頼されていた。よって武力・知力ともに優れた伊達政宗の家臣の方が優れていたことがわかる。

次にそれぞれの軍事力を比較していこうと思う。まず、それぞれの最大動員兵数について考えていこうと思う。上杉謙信はおよそ 36250 人と言われており、伊達政宗はおよそ 25000 人と言われている。よって数では上杉軍の方が勝っていると言える。次に、それぞれの軍の特徴について考えていこうと思う。上杉軍は、謙信が自ら毘沙門天の化身と信じたことや、謙信が治めていた越後の風土気候が影響し、非常に強かった。そして、主力戦闘部隊は全体の三分の二を占める槍隊であり、鉄砲の数は少なかった。よって接近戦を好んでいたことがわかる。それに対し、政宗は「騎馬鉄砲隊」というものを持っていた。これはその名の通り鉄砲を備えた騎馬隊のことで、それぞれの長所を活かしたものであり、向かうところ敵なしの部隊であった。しかし大坂夏の陣の際に、真田幸村がこの騎馬鉄砲隊をぎりぎりまで引き付けて接近戦に持ち込み、撃退に成功している。したがって、伊達軍は接近戦を好む上杉軍には相性が悪い。よって最大動員兵数とも合わせると、軍事力は上杉軍が勝っていたと言える。

最後にそれぞれの戦術を比較していこうと思う。伊達政宗は摺上原の戦いにおいて敵が退却するところにあらかじめ別働隊を廻り込ませ、それが敵の後方に存在した橋を壊し、退路をふさぎ、敵を撃破した。よって、別働隊を使うのが上手かったことがわかる。また上杉謙信も別働隊を使うことを得意としていた。栃尾城の戦いにおいて謙信は敵が陣を敷くであろう場所に予め部隊の一部を隠し兵として設置、そして敵が着陣したところを急襲させ、そこへ本隊が駆け付けて、敵を撃破した。また、謙信は別働隊を防御としても用いる。八幡原の戦い（第四次川中島の戦い）において武田の別働隊に対し、謙信は別働隊を備えさせ、本隊対決をする時間を稼いだ。このように謙信は別働隊を巧みに操った。よって、上杉謙信と伊達政宗はどちらも別働隊を使うという戦術を得意とするが、その能力において、上杉謙信の方が勝っていたと言える。

よって2対1で上杉謙信の勝利とする。



上杉謙信

主な家臣：直江景綱、長尾政景、本庄繁長、  
北条高広

最大動員兵数：36250 人



伊達政宗

主な家臣：伊達成実、片倉景綱、  
支倉常長

最大動員兵数：25000 人

## ⑤島津義久 対 長宗我部元親

まずはそれぞれの家臣を比較していこうと思う。島津家には義久・義弘・歳久・家久の島津四兄弟がいた。これは知力・武力ともに優れ、戦国最強ともうたわれ、島津家を九州制覇へと導いた。対して、長宗我部元親には外交が得意な谷忠純や知略に優れた吉田孝頼がいた。しかし、三大勢力が存在する九州で、主を覇者へと導いた島津家の家臣の方が優れていたと言える。

次にそれぞれの軍事力を比較していこうと思う。まず、最大動員兵数について考えていこうと思う。島津義久はおよそ 37500 人、長宗我部元親はおよそ 18750 人とされている。よって最大動員兵数では島津軍の方が勝っている。しかし、長宗我部軍は「一領具足」と呼ばれる軍事制度を採り、領主からの動員がかかった時、素早く召集できるようになっていた。よって、元親は数においてはカバーできるかもしれない。次に、それぞれの兵質を比較していこうと思う。島津軍は死を覚悟した時に非常に強く、中でも関ヶ原の戦いで「島津の退き口」は有名である。それに対し、長宗我部軍は半農半士であり、非常に勇敢で「死生知らずの野武士なり」と言われるほどであった。よって、両軍とも兵の水準は高かったと言える。しかし、島津軍は鉄砲戦術にも長けていた。したがって、島津軍が勝っていたと言える。

最後にそれぞれの戦術を比較していこうと思う。島津義久は本隊を囫とし、撤退してきた本隊を追撃する敵を伏兵によって撃破するという「釣り野伏せ」と呼ばれる戦術を得意とした。それに対し、長宗我部元親は兵力を二つに分けるといいう戦い方を元親の有名な戦いである八流の戦いや四万十川の戦いで用いた。ここで元親が、八流の戦いで行った、兵を二分し、挟撃すると仮定する。前後で挟んだ場合は義久の策が上手いはず、囫である島津の本隊を倒すことができるかもしれないが、側面から挟んだ場合は義久の策にかかる可能性がある。よって戦術面においてはどちらが勝っていたとは言えない。

よって2対0で島津義久の勝利とする。



島津義久

主な家臣：島津義弘、島津歳久、島津家久、  
新納忠元

最大動員兵数：37500 人



長宗我部元親

主な家臣：長宗我部信親、吉田孝頼、  
谷忠澄

最大動員兵数：18750 人

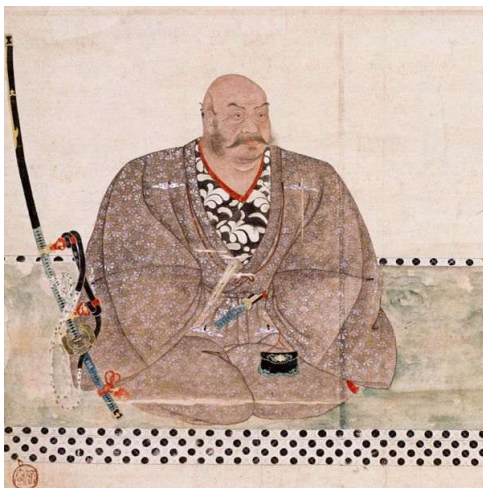
## ⑥武田信玄 対 徳川家康

まずはそれぞれの家臣を比較していこうと思う。武田信玄の家臣には馬場信房や山県昌景をはじめとする「武田二十四将」がいた。それに対し、徳川家康には酒井忠次・本多忠勝・榊原康政・井伊直政の徳川四天王をはじめとする「徳川十六神将」がいた。どちらも戦国時代最強とも呼べる家臣団であるが、武田は24人で、徳川は16人、よって武田家臣団の方が充実していたと言える。

次にそれぞれの軍事力を比較していこうと思う。まずそれぞれの最大動員兵数について考えていこうと思う。武田信玄はおよそ32500人で、徳川家康はおよそ100000人と言われている。数では圧倒的に徳川軍の方が有利である。しかし、信玄が率いた武田騎馬隊は日本最強とよばれた。理由は信玄が治めていた甲斐・信濃は山岳地帯であるため、そこで生まれ育った武田の兵は足腰が強く、強靱な肉体を誇っていたということと、馬の質も良かったからである。対して徳川軍も「三河衆一人に尾張衆三人」といわれるほど強かった。理由は武田の兵と同じように、育った環境であった。また徳川軍は主に対して非常に忠実であった。以上をまとめるとやはり軍事力の面では数の多い徳川軍の方が強かったと言える。

最後にそれぞれの戦術を比較していこうと思う。両者は一度三方ヶ原の戦いで対峙したことがある。浜松城に籠城する家康に対して信玄はあえてその前を素通りし、三方ヶ原にて家康を待ち構える。素通りされたことでプライドを傷つけられた家康はそれを知らずに背後から攻撃すれば勝機ありと見て、武田軍を追撃。しかし、待ち構えていた武田軍によって徳川軍は凄まじい攻撃に遭い、惨敗する。完全に家康は信玄の策にはまったことがわかる。よって信玄の方が戦術面では優れていたと言える。

よって2対1で武田信玄の勝利とする。



武田信玄

主な家臣：板垣信方、武田信繁、山本勘助、  
真田幸隆、馬場信房、内藤昌豊、  
山県昌景、高坂昌信

最大動員兵数：32500人



徳川家康

主な家臣：酒井忠次、本多忠勝、  
榊原康政、井伊直政、  
服部正成

最大動員兵数：100000人

## ⑦織田信長 対 島津義久

まずはそれぞれの家臣を比較していこうと思う。織田信長の家臣は柴田勝家や丹羽長秀、明智光秀を中心とし、非常に強かった。対して、島津家には島津四兄弟と呼ばれる知力・武力ともに優れた最強の兄弟がいた。しかし、圧倒的な織田信長の快進撃を支えた織田家臣団には敵わない。よって織田信長の家臣の方が強かったと言える。

次にそれぞれの軍事力を比較していこうと思う。まずはそれぞれの最大動員兵数について考えていこうと思う。織田信長はおよそ 175000 人、島津義久はおよそ 37500 人と言われている。よって数では圧倒的に織田軍が勝っていると言える。しかし、島津軍は死を覚悟した時に非常に強く、関ヶ原の戦いでの「島津の退き口」が有名である。だが、いくら島津軍が強かったとしても先ほどの兵力差を埋めるのは不可能なように思える。また、織田軍は 3000 挺もの鉄砲を保有し、「三段撃ち」と呼ばれる射撃方式をとっていた。それに対して、島津軍も鉄砲戦術に優れており、九州平定にも大きな存在感を持った。よってどちらも鉄砲を上手く利用していたことがわかる。よって以上をまとめると、数で圧倒する織田軍の方が軍事力においても勝っていたと言える。

最後にそれぞれの戦術を比較していこうと思う。織田信長は常に敵よりも多くの兵力を用意し、常に有利な状況で戦った。対して、島津義久は本隊を囮とし、撤退してきた本隊を追撃する敵を伏兵によって撃破するという「釣り野伏せ」を幾多の戦いで使用し、勝利をあげた。この戦術は自軍の兵数が敵軍の兵数より圧倒的に少ない場合に用いることが多く、その戦術によって幾度もの勝利を手にしたので、常に敵よりも多くの兵を用意する信長には相性が良いことがわかる。よって戦術においては島津義久が勝っていたと言える。

よって 2 対 1 で織田信長の勝利とする。



織田信長

主な家臣：柴田勝家、丹羽長秀、明智光秀、  
滝川一益、池田恒興、前田利家、  
佐々成政

最大動員兵数：175000 人



島津義久

主な家臣：島津義弘、島津歳久、  
島津家久、新納忠元

最大動員兵数：37500 人

## ⑧武田信玄 対 上杉謙信

まずはそれぞれの家臣を比較していこうと思う。武田信玄の家臣には山本勘助や馬場信房、山県昌景を中心とする「武田二十四将」がおり、戦国時代最強格の家臣団を誇っていた。対して、上杉謙信の家臣には「上杉二十五将」がいたが、謀反が多く、結束力がなかった。よって、信玄のカリスマ性によって結束が高く、武力・知力ともに優れた武田家臣団の方が強かったと言える。

次にそれぞれの軍事力を比較していこうと思う。まずはそれぞれの最大動員兵数について考えていこうと思う。武田信玄はおよそ 32500 人、上杉謙信はおよそ 36250 人とされている。よって、数では僅かに上杉軍が勝っている。次にそれぞれの兵質について考えていこうと思う。両軍ともかなり兵が強く、どちらも育つ環境によって兵質が高いということが共通している。さらに、両者がぶつかった八幡原の戦い（第四次川中島の戦い）では、両者とも約 4000 人の死者を出している。よって兵質においてはどちらが勝っているとは言えない。また、どちらも鉄砲隊を保持していたが、あまり重視していなかった。したがって最大動員兵数で僅かに上回っている上杉軍が勝っていたと言える。

最後にそれぞれの戦術を比較していこうと思う。武田信玄の得意な戦法に「きつつき戦法」がある。これは敵陣に自身の別働隊を進軍させるなどして、敵軍を挑発しておびき寄せ、敵軍がそちらに気を取られている間に、その背後から本隊が一気に攻撃を仕掛けるというものである。これは先ほど言った八幡原の戦いでも使用した。しかし、謙信はこの策を見破り武田軍本隊を攻撃し、上杉軍が優勢となった。ところが、そこへ遅れて駆け付けた武田別働隊に挟まれ、形勢逆転となる。結果的に、この戦いは引き分けに終わった。だが、やはり武田信玄の策を見抜いた上杉謙信の方が戦術面では優れていたと思われる。

よって1対2で上杉謙信の勝利とする。



武田信玄

主な家臣：板垣信方、武田信繁、山本勘助、  
真田幸隆、馬場信房、内藤昌豊、  
山県昌景、高坂昌信

最大動員兵数：32500 人



上杉謙信

主な家臣：直江景綱、長尾政景、  
本庄繁長、北条高広

最大動員兵数：36250 人

### ⑨織田信長 対 上杉謙信

まずはそれぞれの家臣を比較していこうと思う。織田信長の家臣には柴田勝家・丹羽長秀・明智光秀・滝川一益などがおり、戦国大名の中でも最強の家臣団を誇っていた。それに対し、上杉謙信には「上杉二十五将」と呼ばれた家臣団がいたが、謀反が多く、まとまりがなかった。また実力においても織田信長の圧倒的な天下統一事業を支えた織田家臣団の方が優れていたと考えられる。

次にそれぞれの軍事力を比較していこうと思う。織田信長の最大動員兵数はおよそ175000人、上杉謙信の最大動員兵数はおよそ36250人と言われており、数では圧倒的に織田軍が勝っている。しかし、上杉の兵は謙信が自らを毘沙門天の生まれ変わりと信じたことや、謙信が治めていた越後の風土気候から、とても強かった。だが、この兵数差を埋めることはできないように思える。また、織田軍は上杉軍にはない大量の鉄砲を持っていた。よって軍事力においても織田軍が勝っていたと思える。

最後にそれぞれの戦術を比較していこうと思う。織田信長の戦い方は敵よりも多くの兵を用意し、野戦築城を行っての防御戦をするというものであった。対して、上杉謙信は別働隊を攻撃や防御として使うことに長けており、また接近戦を好んでいた。よって謙信は、野戦築城をし、大量に保持していた鉄砲を活かすための防御戦を行った信長には相性が悪いと言える。実際に信長はこの戦い方によって長篠の戦いで、日本最強と呼ばれた武田騎馬隊を破った。よって戦術においても織田信長が勝っていたと言える。

よって3対0で織田信長の勝利とし、最も強かった戦国大名を織田信長とする。



織田信長

主な家臣：柴田勝家、丹羽長秀、明智光秀、  
滝川一益、池田恒興、前田利家、  
佐々成政

最大動員兵数：175000人



上杉謙信

主な家臣：直江景綱、長尾政景、  
本庄繁長、北条高広

最大動員兵数：36250人

## おわりに

僕は本論文を通して戦国大名のことについて詳しく知ることができた。また、自分の中で気になっていた最も強かった戦国大名は誰かという疑問に対して、“織田信長”という答えを出す事ができた。僕は小学生の頃に織田信長についての本を読んでから織田信長が好きで織田信長が最も強いと思っていた。そして、色々な戦国大名を詳しく調べるうちに改めて織田信長の強さを知ることができた。また、こんなにも強かったのだと強さを初めて知ることができた戦国大名もいた。本論文を読んで少しでも戦国大名やその他戦国時代のことに興味を持って頂けると幸いだ。最後になりましたが、本論文を書くにあたってご指導くださった先生方、ありがとうございました。

## 参考文献

- ・『戦国大名|NHK for School』<https://www2.nhk.or.jp>
- ・『戦国時代勢力図と各大名の動向』<https://sengokumap.net>
- ・小和田泰経、上永哲矢、稲泉知、中丸満、長谷川敦『地域別×武将だからおもしろい戦国史』、朝日新聞社、2021年
- ・小和田哲男『知識ゼロからの戦国武将入門』、幻冬舎、2007年
- ・『伊達政宗の家臣団/ホームメイド』『上杉謙信の家臣団/ホームメイド』『毛利元就の家臣団/ホームメイド』『長篠の戦いと鉄砲・西洋銃/ホームメイド』『武将の得意な戦術/ホームメイド-刀剣ワールド』『合戦の種類～野戦・海戦・攻城戦～/ホームメイド』『火縄銃（鉄砲）と戦国武将/ホームメイド』『島津家の歴史と武具（刀剣・甲冑）/ホームメイド』『長宗我部家の歴史と武具（刀剣・甲冑）/ホームメイド』『長篠の戦い』『木津川口の戦い古戦場：大阪府/ホームメイド』『四万十川の戦い古戦場：高知県/ホームメイド』『三方ヶ原の戦い古戦場：静岡県/ホームメイド』<https://www.touken-world.jp>
- ・『【織田信長の戦い方】その特徴と戦術を簡単解説！スピードと物量作戦』『武田信玄の強さはどのくらいか？信長・家康・謙信など他の戦国大名と比較してみた』『【上杉謙信】強さの秘密を逸話・エピソードで解説！世界史上最強か？』<https://rekisiru.site>
- ・『戦国大名の軍事力はどれくらい？』<https://rekishi-daisuki.com>
- ・高橋延年、ほか共著『歴史群像シリーズ⑪徳川家康』、学習研究社、1989年
- ・谷口研、ほか共著『歴史群像シリーズ⑩豪壮 秀吉軍団』、学習研究社、1992年
- ・西ヶ谷恭弘、ほか共著『歴史群像シリーズ⑭戦国 北条五代』、学習研究社、1989年
- ・毛利彰 ほか共著『歴史群像シリーズ⑧上杉謙信』、学習研究社、1988年
- ・かみゆ歴史研究部『最強！戦国武将決定戦』、株式会社ワン・パブリッシング、2022年
- ・『浦戸一揆と一領具足-浦戸の歴史-高知市立浦戸小学校』<https://www.kochinet.ed.jp>
- ・『武田二十四将』<https://www.city.kofu.yamanashi.jp>